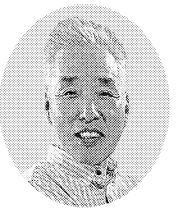
＊M1016H000YMACC120709000000472＊

16日付　山城A朝刊通し　◎E・新随想箱
2020年10月13日10時59分01秒　ID=CC120709000000472
PDFゲラ出力　箱組　校正回数＝66　79倍　0×　23行　0

随想やましろ

名医を探せ

門阪　庄三



かかりつけ医の仕事の一つに、より専門的な検査や治療が必要な患者さんを総合病院などへ紹介することがあります。医療技術の発達で、医療の均一化が図られ、一部の領域を除いて病院の手術技量や検査能力の優劣を考慮するようなことはありません。とは言え私たちにもいわゆる名医を求める気持ちないわけではありません。しかし昔とはその名医は異なってきました。名医の条件は例えば大学教授であるという肩書ではなく、もっと別のところにあると思われます。

患者に病状を説明する医師の態度が少し変わってきています。患者が自分の病気をどれくらい理解しているかを確かめながら、どの治療法を選んだら患者の利益になるかを対話しながら決めていく医師が増えています。対話ですから難しい医学用語はなるべく避けて、「わたしに任せなさい」というような父権主義ではなく、相手の目を見ながらの説明です。そしてこのような医師は概して技量が優れています。対話力は名医の大きな条件になっています。

最近、総合病院へ紹介した患者と家族が、病院で説明をしてもらったが決めきれないでいたら、担当の若い医師から「長い付き合いのあるかかりつけ医と相談してみたら」と言われたと来院されました。十分な説明を受けても、治療方法を選択するのは容易ではありません。患者や家族に時間を与え、互いに話し合う機会をつくる。この若い医師の進め方など大変勉強になります。

私も彼らに習ってと思いますが、反省するところも多い。生活習慣病で来られた若い世代の方などに、自分が気づかないうちに「説教」してしまっていることがあります。治療を受けにきたのに「食べ方が悪い」などはいい迷惑です。また時には厳しく言い過ぎて、患者さんの今までの食習慣がまるで駄目なような印象を与えて「追い詰める」ことになって後から頭をかくこともあります。対話力が足りません。

名医になるのは難しい。（かどさか内科クリニック）